

中堅教師と 若手教師がペアになり、 雑談を通して 教育の知見を広げる

徳島県立城南高校

徳島県では、先輩教師（メンター）と後輩教師（メンティー）がチームを組み、研修や個別支援を行う「メンター制度」の実施を、県内の学校に推奨している。同制度には、若手教師の資質・能力の向上や精神的孤立の防止、ロールモデルとの出会い、そして、中堅教師のミドルリーダーとしての成長などのねらいがある。2021年度、メンター制度を実際に体験した徳島県立城南高校の2人の教師に話を聞いた。

1年間、毎朝欠かさず
雑談をしながら教室へ

徳島県立城南高校の保健体育科の中本浩平先生は、2021年度、教職10年目研修に参加したことがきっかけとなり、「メンター制度」を実施することになった。同年度に1学年担任を務めた中本先生がメンティーにと声をかけたのは、

隣のクラスの担任で、当時教職5年目の板谷和輝先生だった。

徳島県が実施するメンター制度では、先輩と後輩がどのようなことに取り組むのかは、自分たちで決めることになっている。当初2人は、学校行事の運営をメンター制度を取り入れながら行う予定だったが、コロナ禍で行事の中止や延期が相次ぎ、思うようにいか

なかった。そこで2人が話し合っ
て決めたのは、「毎朝、職員室か
ら受け持ちのクラスがある4階ま
で、一緒に行くこと」だった。

「私は保健体育科で、板谷先生
は英語科と、担当教科が異なりま
す。そのような2人にとって有意
義なことは、改まって1つのテー
マについて議論をすることなど
はなく、毎日、短時間でもよい
から雑談をして、コミュニケーション
を取ることでと考えました」（中
本先生）

「中本先生とは同じ学年団です
から、行事などについても話しま
したが、学校とは関係のないこと
もたくさん話しました。例えば、
私は子どもが生まれたばかりだっ
たので、仕事と育児の両立の大変
さを聞いてもらったり、中本先生
の経験を聞かせてもらったりした
こともあります。私生活の悩みや
仕事での弱音など、職員室ではあ
まり話題にしないことを話すこと
ができたのは、とてもありがた
かったです」（板谷先生）

2人は1年間、毎朝欠かさず雑
談をしながら階段を上った。



1学年学年付
中本浩平
なかもと・こうへい
教職歴10年。同校に赴任し
て4年目。保健体育科。



2学年担任
板谷和輝
いただに・かずき
教職歴5年。同校に赴任し
て3年目。英語科。

学校概要

設立 1875（明治8）年
形態 全日制／普通科・応用数理科／共学
生徒数 1学年約310人
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、名古屋大、神戸大、岡山大、広島大、徳島大、鳴門教育大、香川大、九州大などに144人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ392人が合格。

「メンター制度として始めた取
り組みでしたが、私にとっては中
本先生との心地よいコミュニケー
ションの機会でしたし、だからこ
そ続けられたのだと思います。毎
朝の雑談は本当に楽しくて、たと
え自分が先に教室に行く準備がで
きたとしても、職員室で中本先生
の準備が終わるのを待っていました
」（板谷先生）

毎朝の雑談を土台に関係性が深
まるにつれて、中本先生と板谷先

生は、クラスを超えた支援をし合うようになった。

「中本先生から、『板谷先生のクラスの〇〇さんが、昨日の授業でリーダーシップを発揮していたよ』などと、私が気づいていない生徒の長所を教えてもらい、それを踏まえて翌日以降の生徒への声かけを見直したこともありました。自分とは異なる視点での気づきを共有してもらったことで、生徒理解が深まりました」（板谷先生）

メンター制度は、中本先生にとっても学びの機会となった。

「教壇に立つ時、教師は1人で40人の生徒と向き合います。孤独を感じることもありますし、『教師としての自分のあり方はこれだよいのだろうか』と考えてしまうこともあります。板谷先生は、生徒と同じ目線で、生徒の心に響くように話をするができる先生なので、生徒との距離の取り方は、私にとっても勉強になりました。また、板谷先生との関係を通して、今後、ほかの若手の先生たちと接する時も、その先生の個性やペーシングを理解し、尊重するなど、どの

ように接していくとよいのが見えてきたように思います」（中本先生）

担当教科やタイプが異なる同僚に多くの気づきをもたらした

21年度の3学期の全校球技大会が中止となった時に、「生徒が仲間や先生と一体感を味わえる機会をつくってあげたい」と、中本先生と板谷先生は、学年独自のクイズ大会の企画を立案した。

「ICTと校内放送を使って、物理的な距離を保ちながら、教師と生徒や生徒間の心の距離を近づける企画を考えました。中本先生と毎朝コミュニケーションを取る中で、一体感を味わえる行事が生徒たちには必要であるといった共通の認識を持つことができたのです」（板谷先生）

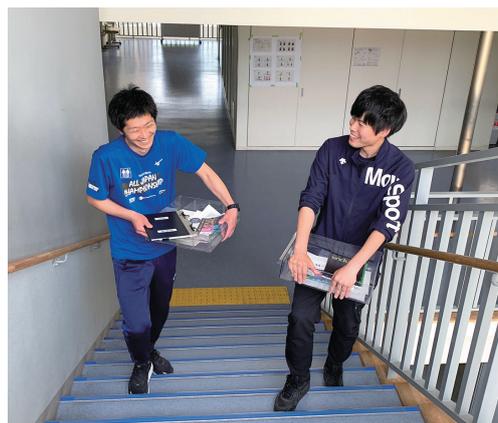
毎朝のとりとめの短い短時間の雑談が、なぜ、生徒理解の深化や新しい活動への意欲につながったのか。2人は、担当する教科、そして教師としてのタイプが違ったからこそ、気軽な内容の会話が多くなり、それが奏功したのだろう

と考えている。

「同じ保健体育科の先生との会話の方が、授業改善の具体的な方法など、自分の教育活動に直結する話題が多いでしょう。しかし、英語科の板谷先生と話す中で、海外留学など、なかなか学ぶ機会がなかったテーマについて知見を得ることができました。想定していなかった形で、教師としての幅が広がった気がします」（中本先生）

「中本先生は、生徒を引き締める時の声かけなど、私が不得意な部分が上手です。中本先生が自分と違うタイプのメンターだったからこそ、朝の雑談の中で学べたことが多くあったのだと思います。ただ、1番のポイントは、2人とも、『何かを教えよう』『何かを得よう』などと気負っていなかったことだと思っています。私は中本先生に、自分の話を聞いてもらいたかったし、中本先生の話を聞きたかった、それだけです。雑談だったからこそ、様々な視点での気づきを得られたのだと思います。研究授業などはまた違った、楽しい学びの場でした」（板谷先生）

毎朝、2人で雑談をしながら上った教室までの階段。わずかな時間だったが、様々な気づきを2人にもたらした。



読者の先生方へ！ ワンポイントアドバイス

私と中本先生との取り組みは、毎日の放課後に改まって行う10分間の面談などではなく、教室に行く時間を使うだけでしたから、負担感はありませんでした。毎日だけど、無理がなかったから楽しく続けられたのだでしょう。ただ、毎朝の雑談は、自分にはプラスでしたが、朝は授業準備など、自分の時間に使いたいと考える先生もいるはず。悩みを気軽に相談できる場は大切ですが、どのような場が合うかは人それぞれなので、そうした場は複数パターンの選択肢があった方がよいと思います。（板谷先生）